

生きづらさを抱えた若者の社会的包摂に関する社会学的研究：「誰かを頼りながら働く」という新たな自立像の構築

金本，佑太

<https://hdl.handle.net/2324/7362164>

出版情報：Kyushu University, 2024, 博士（人間環境学），課程博士
バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



氏 名 : 金本 佑太

論文題名 : 生きづらさを抱えた若者の社会的包摂に関する社会学的研究
—「誰かを頼りながら働く」という新たな自立像の構築—

区 分 : 甲

博 士 論 文 の 要 約

本論文では、地域若者サポートステーション（以下、サポステ）事業の利用経験者を取り上げ、彼らの無業実態、支援利用過程、就労達成後の状況を明らかにした。サポステ利用者の経験から、生きづらさに対応するための、また社会的包摂を維持するための方法論として、「誰かを頼りながら働く」という若者の自立のあり方を抽出し、これからの社会における新たな就労モデルとして提示した。まず序章では、日本社会における若年無業者増加の経緯を整理したうえで、若年無業経験者の人生経験を生きづらさという概念から、また社会的排除／包摂アプローチから検討する必要性を論じた。

1 章「若者の生きづらさに関する議論の展開」では、生きづらさ概念に関する議論を整理した。若者の生きづらさを生じさせる社会構造の変動を踏まえ、本論文では若者が学校から仕事への移行に関して抱える生きづらさを「新自由主義が浸透し一見選択肢が多様化したようにみえる現代社会において、社会構造の変動により生じた生活上の様々な困難に対して、個人化や自己責任論の強化によって、有効な解決策をとることができず、改善が見込めない状況に追い込まれていく過程で生じる意識」と定義した。これまで生きづらさは、同じく生きづらさを抱えた仲間や支援者との同質的な関係性のなかで緩和されていくという直線的議論が主流であった。しかし無業による生きづらさが就労支援利用によって緩和された後、その後の進路や職業生活展開のなかでどのような変容をみせるのかについては十分検討されておらず、生きづらさやその対処方法の変容について若年無業経験者の事例から検討する必要がある。

2 章「社会的排除／包摂アプローチに関する議論の展開」では、生きづらさと同様に、近年若者の困難に着目する際に用いられる社会的排除／包摂アプローチについて整理した。社会的排除とは単に経済的貧困に着目するのではなく、社会参加の欠如や不利の複合性に着目し困難な状況にある人々の実態を示そうとする概念である。同時に社会的包摂の方法論検討も議論の射程に含まれており、現状では社会的包摂の達成において労働参加をいかに担保するかという点が強調されている。しかし労働参加の強調は若者を就労達成に駆り立てる圧力を持ち、そのことがかえって若者を排除する方向性に作用することもある。そのため社会的包摂は、経済的側面だけでなく、社会的、文化的、政治的側面といった複層的アプローチから検討されなければならない。こうした複層的アプローチによって若者を支援する存在としてサポステ事業が位置づけられるが、一方でそうした支援を利用することでどのように若者の社会的包摂が達成されるのかはこれまで十分に検討されていない。この点を本論文で明らかにすると同時に、労働市場における経済的安定を重要視する従来型の社会的包摂の限界を乗り越える、新たな包摂のあり方を構想する必要があることを示した。

3 章「若者就労支援の制度的展開と地域若者サポートステーション事業の位置づけ」では、日本社会における若者就労支援の制度的展開として、サポステ事業が登場してきた経緯やその位置づけ、

また事業内容の評価について整理した。新自由主義の進展のなか、グローバル経済競争に打ち勝っていける人材の育成と社会的排除の克服という2つの目的の接合点として、日本の若者就労支援は開始された。しかしそこでは労働供給側としての若者の雇用可能性の向上が目指され、若者の抱える困難の実態は十分に考慮されていなかった。その後若者の就労阻害要因の多様性が認識され、サポステ事業が登場する。サポステ事業は若者のコミュニケーション能力や自信を向上させる一方で、多様な困難を抱える若者の支援と就職達成数を増加させる必要性との間でジレンマに陥っていることや、若者への所得保障が整備されておらず家族の経済的支援がない若者の利用が難しいことなど、限界も指摘されている。とはいえサポステ事業を取り上げることは、そこに集う若者の困難の多様性を示すことにつながり、今後どのような形で若者就労支援を発展させていく必要があるのかを検討する際の手がかりとなる。この点をサポステ事業に着目する意義として提示した。

4章「若者の無業経験の実態」では、サポステ利用経験のある若者の無業実態を確認し、そのうえで彼らの生きづらさがサポステ利用によってどのように緩和されていくのかを整理した。具体的には、学校生活でのつまずきから他者との関係性構築を苦手としていた若者がサポステ職員や他の利用者との交流を通じて自信を回復させていく過程や、将来への展望を抱けなかった若者がサポステの講座や職場体験を通じて具体的な進路を見出していく過程、またそうした支援利用経験を経て、それまでとらわれていた自己責任規範が弱まっていき、誰かを頼りながら働くという生き方を受け入れる過程が、対象者の語りから明らかとなった。そうした「誰かを頼りながら働く」という認識の獲得と実践は、従来型の社会的包摂が重要視してきた経済的安定とは異なり、様々な他者の助けを受けながら困難に対処しつつ就労に慣れていくという社会関係的安定として位置づけられ、若年無業経験者の社会的包摂の維持・促進のために重要であることを指摘した。

5章「就労達成後の若者の職業生活展開の実態」では、4章で取り上げた調査対象者のうち就労を達成した若者が、サポステ利用後どのような職業生活を送っているのかを検討した。サポステ利用を経て自己責任規範へのとらわれや劣等感などの生きづらさを緩和させた若者は、就労達成後も何かあれば誰かを頼っていきたいという展望を持ちながら社会参加を果たしていく。しかしその後何らかの困難を抱えた場合に、彼らは再びサポステを思い出して頼ったり、適切な他者へ助けを求めたりしながら困難に対処していくことは必ずしも容易ではなかった。こうした若者の状況は、一見支援者から自立しているようにみえて、自己責任規範へのとらわれという生きづらさに再接近してしまう過程でもあった。この点は「就労自立の論理」の前景化と「支援の場の論理」の後景化として位置づけられる。

6章「地域若者サポートステーションと地域の関係機関の連携」では、若者が社会との接点を失わないよう、サポステが地域の関係機関との連携体制をどのように構築しているのかを明らかにした。日本社会の若者就労支援は、労働需要側としての若者の雇用可能性の向上に特化してきた。このことは、自らを排除する社会に若者を再適応させようとする取り組みに過ぎないとして、批判的に評価されることが少なくない。一方でサポステは、若者を受け入れる社会の側への働きかけも行っている。そうした働きかけとして、学校中退後の若者が孤立しないための教育機関との連携や地域におけるサポステの認知度向上の取り組みが存在する。事例のサポステからは、地域社会のキーパーソンをサポステ職員として採用したり、地域の関係機関との連携会議の開催や高校へのアウトリーチなどによって、徐々に地域のなかでサポステの認知度を向上させ、若者が教育から離脱した後に孤立しないような地域社会のネットワークが構築されている現状が示された。

終章『「誰かを頼りながら働く」ことの今後の展望』では、従来の生きづらさや社会的排除／包摂アプローチの議論の限界に対して、本論文が貢献しうる点を示した。生きづらさは多面的であり、「無業からくる自己否定的感情」の一方的な解消を目指す、かえって「自己責任規範へのとらわ

れ」という生きづらさの別側面に再接近してしまう。この「生きづらさ緩和のジレンマ」は、本論文で明らかとなった「実態としての生きづらさ」の特徴である。またそうした生きづらさを一方的に解消しようとするのではなく、生きづらさを抱えている状況を認識することで、自らを支えてくれる他者との関係性を構築・維持しながら働くことができるという、「方法としての生きづらさ」の側面もある。こうしてみれば、「誰かを頼りながら働く」ことの出発点として、生きづらさを位置づけることもでき、この点は本論文の重要な知見となる。また社会的包摂の達成過程についても、労働市場への再適応という社会から与えられた包摂の限界を認識し、誰かを頼りながら困難に対処していくことを目指すという従来型の社会的排除／包摂の脱構築が行われており、社会的包摂の段階的把握の必要性が示された。また、そうした社会関係的安定を軸にした包摂を可能にするため、メゾレベルで求められる社会的対応についても指摘した。

これからの若者の新たな自立のあり方として「誰かを頼りながら働く」ことが重要となるが、そうした働き方を若者に担保できるよう、サポステ事業は若者にとって頼れる選択肢の一つとなったり、地域社会に対して若者支援の重要性を問いかけてたりするという役割が期待される。また政策的対応として、若者が家族の扶養を受けずとも経済的に安定した生活を送りながら支援を利用できるような所得保障の拡充も検討されなければならない。さらに今後の研究では、無業経験者にとどまらず多様な背景を持つ若者が「誰かを頼りながら働く」ことを新たな自立のあり方として選び取っていけるような環境整備のため、地域社会の側の若者支援に対する認識のあり方や、若者側の支援利用に関する社会意識の把握などが求められる。